

〈中本正智博士 著書紹介〉 『琉球方言の総合的研究』

内間, 直仁

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

72

(終了ページ / End Page)

77

(発行年 / Year)

1995-02-24

# 『琉球方言の総合的研究』

内 間 直 仁

## はじめに

「海に入るときには、急に丸ごと体から入ってはダメだよ！。まず、手と足から海水に浸す。心臓から離れているところを順応させるんだ。そして次第に顔、腿と浸して行って、ゆっくりと海水に体を入れていくんだ」。海にすぐ飛び込もうとするのを制して、中本さんが私に与えた注意であるが、あたかも昨日のように思える。午後五時頃調査を終えて、二人で奄美大島宇検村湯湾の港で泳ぐことになったときのことである。法政大学沖縄文化研究所の『琉球の方言』の刊行をはじめたばかりの頃であった。その前年は、二人で八重山川平の調査をしている。あの頃は、毎年のように一緒に琉球方言の調査に出かけ、調査後はただちにまとめて『琉球の方言』として刊行していた。与那国では約四週間ほど民宿に滞在して調査したこともある。その時は強烈な台風にも出くわした。「これは、家内が持って行けっさかないんだ」といいながら、弁当箱いっぱい詰めた梅干しを、食事の度においしそうに食べていた。「君も食べなさい。酸っぱくても、長期の旅の疲れた体にはとてもいいんだ。食物に好き嫌いつくっちゃだめだ」とも注意された。朝目を覚ますと、すでに中本さんは朝の運動も済ませ、私が寝ている傍で静かに調査資料に目を通していているというのが常であった。与那国のなんと浜でも夕方によく海に入った。宮古大神島の調査では、民家を借りて自炊しながらの調査であった。手を伸ばせば届くような夜空の星が、澄んでいるがゆえに鋭い固い光を放っていたのを今も鮮やかに思い出す。喜界島、徳之島では、話者やお世話いただいた方々とおそくまで飲んで騒いだ。沖永良部島では、照りつける暑さの中、空港までの農道を、なぜか車にも乗らず、荷物を引きづりながらあえぎあえぎ二人で歩いた。

今度の『琉球の方言』は中本さんの追悼号だという。こういう事態を迎えるとは微塵も思い及ばなかった。あの笑顔、あの声が聞こえてくる今、なかなか現実とは受けとめにくい。

中本さんが入院して手術したと聞いたときは、全く驚いてしまった。病気とは縁遠い人と思っていたからである。大塚の病院へ見舞いにいって、お顔をみて最初に出た言葉が「どうしたの！」であった。中本さんは、大手術後でありながら、至って元気で、「どうしたのって聞かれても――」と笑いながらこたえていた。その声の明るさに、ああ大丈夫だ、良かった！と安心したものである。予想通り、その後中本さんは順調に回復して、また研究に専念するようになった。中本さんにも、一時の故障なんて言うものがあつたんだぐらいにしか考えていなかった。会えば、お互い無理しないでおこうと言いつつ言い合いながら、またもとの生活に

戻れてよかったと思っていた。しかし、しばらく経って、二度の入院を聞かされたときは、棒で胸をどんと突かれたようなショックを受けてしまった。同じく大塚の病院へ見舞いに行ってみると、あの笑顔はもうほとんど失われていて、だるそうにベッドに寝ておられた。手を取っても、力がない。そんなはずはない、あるはずがない、と思いながらも、涙が出かかって、それでは、また一所懸命付き添って看病しておられる奥さまにも申し訳ない、とさまざまな思いのまま見つめるよりほかなかった。それでも中本さんは、しばらくは持ち直して、自宅療養することになった。ゆっくり体を休めれば、時間をかければ、必ず良くなるものと信じていたし、祈っていた。がしかし、それも叶わず、ついに三度の入院となり、帰らぬ人となってしまった。痛恨の極みこのうえない！。

中本さんがなくなったことを知らされたのは、二月二十五日の午前一時頃だったかと思う。その日は、朝から大学の前期入学試験の監督をしなければならない日であった。監督の合間を縫って、ご自宅に電話を入れた。ご長男の武志君が電話に出た。「お父さんなくなったんだってね。誠に残念！」とまでは言えたが、後は言葉にならない。

中本さんは、琉球大学、都立大学大学院、都立大学助手と、ずっと一緒に過ごしてきた。その間、先輩の友人として、またなによりも学問の先輩として、常に導いてもらっていた。やさしく、温かく穏やかな、広い心で接してもらっていた。研究の方向はもちろんのこと、なんにつけても、私達の大なる目標であった。中本さんの研究は、緻密な記述的研究から語彙の研究、言語地理学的研究、比較言語学的研究へと進み、ほとんどの研究者がその前で立ち往生している日本語系統論という大きく険しい壁にも、琉球方言の立場から果敢に挑戦し、アジアの周辺言語を調査し、視野に入れながら、波及説という見解を示していた。このスケールの大きい研究にひたすら圧倒されながら、これからの展開に深い関心を寄せ、期待を寄せていたのであるが、志し半ばにして病に倒れ、逝かれてしまった。無念である。琉球方言研究にとっては言うに及ばず、日本方言研究にとってもかけがえのない人を失ってしまった。それ以前に、私は先輩としての中本正智さん、友達としての中本正智さんを失ってしまったという空白感に耐えられないでいる。病に臥している間、ご家族や研究のこともあれこれ考えたことであろう。なによりも、体の不調から来る不安ともぎりぎりのところで闘っていたであろうと思うと、居たたまれない思いにさせられる。しかし、今は、もう不安も去り、中本さんが信仰していた主の御許で安らかな生活に入っているものと信ずる。

以下、私が担当することになった中本さんの著書の紹介に移る。

本書は、平山輝男博士を中心とする中本正智さん達の琉球方言研究三部作のひとつである。最初が『琉球与那国方言の研究』（平山輝男・中本正智共著 昭和39年 東京堂）で、次に本書が出版され、続いて、『琉球先島方言の総合研究』（後述）が出版されるようになる。

『琉球与那国方言の研究』が出版されたとき、那覇の国際通りに面した書店では、本書を店頭飾った。当時、琉球大学の先生方でも、研究書を出版するということは、ほとんど見か

けなかった。それだけに、著者として平山輝男・中本正智と併記された本書が目に入ったときは、すごい心の高ぶりと、なぜか自分も偉くなったような誇らしさが体中に染み渡ったのを、今でも鮮明に覚えている。その頃の中本さんは、琉球方言調査の厳しい日程の合間を縫って、膨大な調査資料を抱えつつ、琉球大学方言研究クラブの後輩たちにも調査結果を報告してくれた。まだ方言研究がどういうものであるかをほとんど知らなかった私などは、その調査報告も十分理解しえないながらも、大学ノートにびっしり書き込まれた資料と、それを控え目に淡々と、それでいて真摯に一途に発表する先輩の姿に畏敬の念をますます深めたことであった。

『琉球与那国方言の研究』が中本さんの琉球方言研究の基礎固めの第一段階とするならば、『琉球方言の総合的研究』は、その第二段階と位置付けることができよう。

『琉球方言の総合的研究』は、465頁からなる大著である。主に、奄美諸島から沖縄諸島にかけての、主要方言の音韻、アクセント、文法、語彙の各部門にわたって記述研究した結果を示したものである。本書は、次の点において従来にない画期的研究書である。

- (1) 奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の各諸島から沖縄諸島へかけての主要方言の体系が記述されている。このような広域を尽くした研究は従来になく、本書によって同地域の方言の実態が初めて明らかにされた。
- (2) 本書の調査資料は、広域でありながら、三名の同一調査者による統一された記述資料である。
- (3) 調査期間も、共時性を疑わしめるような長い年月をかけたものではない。昭和37年から40年にかけての3年間に集中的に実地調査した資料が示されている。
- (4) 音声の観察とその記述が正確で、信頼性が高い。

本書が刊行された当時、とかくの批評もあった。たとえば、荒っぽい調査で、各方言の実態を明らかにしていないとか、性急な調査は実態を正確に把握しえない恐れがあるなどである。たしかに、本書の各地点の記述には斑があり、一様ではない。たとえば、音韻でいうならば、奄美大島名瀬市の記述は比較的詳しいが、その他の奄美大島や徳之島の各方言の記述は、概略を得る程度の記述となっている。アクセントや文法においても同様である。しかし、そうでありながら、奄美諸島から沖縄諸島へかけて、音韻でいうならば、主要32地点の体系を記述した研究は従来なかったことである。本書によって、奄美・沖縄方言の全体の概観もできるようになり、以後の琉球方言研究も本書の研究を基盤にして大きく進展していくようになる。

本書の研究が従来にない規模の大きいものであったがゆえに、そこから得られた結論にも新しいものが多々あった。本書は、第1編総論、第2編音韻、第3編アクセント、第4編語彙、第6編総括、からなる。

第2編の音韻についていえば、まず、各調査地点の音素体系が記述され、音韻対応関係も

明らかにされている。それによって奄美・沖縄方言は、大きく奄美方言と沖縄方言に区画され、奄美方言は、さらに奄美大島・徳之島方言群と与論島・沖永良部島・喜界島方言群との二つに区画されることが明らかにされている。この二つの方言群は、ともに破裂音 p、t、k、摩擦音 ts に有気、無気の対立が認められる点で共通するが（与論島方言ではその対立が失われている）、母音の数では、両方言群は明確に区別される。奄美大島・徳之島方言群は i、e、ī、ē、a、o、u、の七母音体系であるのに対し、与論島・沖永良部島・喜界島方言群では、i、e、a、o、u、の五母音体系である（ただし、喜界島の塩道方言は七母音体系である）。沖縄方言も、母音体系においては、与論島・沖永良部島・喜界島方言群と同じく、i、e、a、o、u、の五母音体系であるが、活用においては、沖縄方言は奄美方言と大きく区別される。沖縄方言はまた、ハ行子音に p 音が残っているか否か、あるいは有気・無気の対立があるか否かなどで、沖縄北部方言と沖縄南部方言に分けて記述されている。

音韻対応では、奄美大島の母音 ī が共通語の e に対応し、ē は連母音の融合によって形成されたものであることを明らかにする。

子音では、カ行子音の「か、き、く、け、こ」の各音が奄美諸島や沖縄諸島でどうなっているのかを明らかにする。概していうならば、奄美諸島や沖縄諸島では、カ行音の「か、け、こ」は、「k → h → 脱落」の変化を辿っている。また、「き」が無気音 k' となるとところと tʃ となるとところがあり、「く」は、無気音 k' となるとところと、無気を失って k となるとところがある。これらカ行音が奄美諸島から沖縄諸島にかけて、どうあらわれるのかを、語頭、語中に分けて記述している。

サ行音の「し、す、せ」は、沖縄諸島、たとえば瀬底方言では、ʔufi (牛)、ʔufi (臼)、ʔafji: (汗)、のように三音とも ʃi となって区別されないが、奄美諸島では、たとえば奄美大島佐仁方言では、ʔufi (牛)、ʔusi (臼)、ʔasi (汗) のように、「し」は ʃi、「す、せ」は si となって、区別するところがある。この「し」と「す、せ」の区別が奄美諸島でどうなっているのかを分布でもって明らかにする。ザ行子音も、奄美諸島で、たとえば奄美大島屋鈍方言のように、ʔada (痣)、kadē (風)、kudu (去年) のように d 音となっている地域とそうでない地域とがあるが、その分布状況も奄美諸島全域にわたって明らかにしている。

ハ行子音は、奄美・沖縄諸島では、p、f、h、となる。たとえば、「鼻」は奄美大島佐仁方言では、pana、古仁屋方言では、Fana、名瀬方言では、hana、となる。これは、沖縄諸島においても同様である。周知のように、ハ行子音は、時代的に p (文献以前) → f (奈良時代から室町時代) → h (江戸時代) のような変化を経てきている。現代の本土方言では、p 音は失われており、f 音も東北方言や雲伯方言などにかすかに残っているのみで、ほとんどの方言では h 音になっている。これが琉球方言では、h 音はもちろんのこと、p、f、も残って用いられている。これら p、f、h が「は、ひ、ふ、へ、ほ」の各音ごとに、奄美諸島から沖縄諸島にかけて、諸方言でどうあらわれるのかを調査し、さらに宮古・八重山・与

那国も含めた全域での分布状況も地図化して示している（巻頭第2図）。

ラ行音の「り」も、沖永良部島・与論島・沖縄諸島では *i* となるが、奄美大島・徳之島・喜界島などでは、*i*、*ri*、*r*、となってあられ、その分布状況も地図化してあってわかりやすい。

第3編のアクセントでは、音韻と同じように、奄美諸島から沖縄諸島にかけてのアクセントの体系が示されている。奄美大島名瀬や沖縄南部奥武方言などでは、4拍までの体系が示されているが、3拍までの体系が示されている地点も多い。その調査結果から、琉球方言のアクセントは、(1) 多型アクセント（徳之島亀津、沖縄北部辺土名、与那国など）、(2) 2型アクセント（奄美大島名瀬、沖縄首里、宮古池間、八重山石垣など）、(3) 1型アクセント（奄美大島喜瀬、宮古長浜、多良間島塩川など）の3種に大別されるとし、その分布図も示されている。また、これらのアクセントの型は、九州の多型アクセントを母体として成立したものであると説いている。

第4編の文法では、動詞活用、形容詞活用、代名詞などの体系が示されている。概して、沖縄諸方言よりも奄美諸方言の記述の方が詳しい。しかし、これほどの広い地域にわたって、多くの方言の活用を記述したのも、本書が初めてである。

この体系記述に基づいて、本書では志向形や終止形の成立についても、新しい見解を示している。志向形は奄美・沖縄方言では、たとえば「書こう」は、*kako*（奄美大島名瀬など）、*kaku:*（奄美大島瀬戸内町与露）、*kakan*（与論島など）、*kaka*（徳之島、沖縄中南部など）、*haka*（沖永良部島、沖縄北部など）のようにあらわれる。本書では、これらはすべて「書かむ」から成立しているとみている。沖縄諸島の *kaka* などは未然形に対応し、助動詞「む」は融合していないとする説もあり、それに対して本書は新しい見解を提示したといえる。

終止形は、奄美諸島では、 $-ri$ 系統と $-n$ 系統の二形があらわれる。沖縄諸島では $-n$ 系統のみが用いられている。たとえば、「書く」は、奄美大島佐仁方言では、*kakjuri*、*kakju:n*の二形があらわれる。沖縄首里方言では、*katju:n*となる。奄美方言にあらわれる *kakjuri* が「書き居り」に対応するということは、服部四郎博士が『日本語の系統』（昭和34年 岩波書店）で説いて以来、ほとんど異論はない。しかし、 $-j$ 系統の *kakju:n*、*katju:n*の成立については、諸説があって定まらない。その中で、本書は、 $-n$ 系統の終止形は「書き居るもの」、すなわち「連用形+居る+もの」から成立しているという見方を示している。この $-n$ 系統の終止形の成立については、今後いろいろな見方が提示されると思われるが、その議論の場を提供したいというだけでも本書の価値は高い。

第5編は語彙で、奄美・沖縄・宮古・八重山の各主要方言の基礎語彙600余語を、各々の語ごとに比較できるように示していて、資料的価値が高い。

以上のように、本書は奄美・沖縄諸島の広い地域にわたる音韻、アクセント、文法、語彙

の各部門を網羅した総合的記述研究という点で従来にない画期的なものであった。本書によって、奄美沖縄方言のみわたしができるようになり、以後の琉球方言研究はこれを基盤に進展していったといえよう。

平山輝男・大島一郎・中本正智共著 昭和41年 明治書院 (千葉大学教授)



手術後、「おもろ鑑賞」(『月刊言語』大修館書店) 100連載終了記念パーティーに奥さまと参加された中本先生